

(二〇一八年度)

### 3 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は18ページ、三問である。)

#### 受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

— 1 —  
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

率直に言えば、私自身にも現実感ほとんど稀薄<sup>きはく</sup>である。むしろそれは私が「現実」に眼をそむけているという意味でも、関心をもたないという意味でもない。関心ならありすぎるほどあり、それでいて何の痕跡も私の内部にとどまらぬという意味である。森有正流に言えば、私はあらゆることを「体験」するが、何ひとつ「経験」しない。ただ無数の情報や解釈が私のなかを通過したにすぎず、ふりかえってみれば夢のような気がするだけだ。

見かけは華々しく「現実」に接触しているようにみえながら、実は深い霧のなかに沈みこんでいる。どんな重々しい切実な体験も、この霧にのみこまれると、たちまちはてしなく遠のいていく。たとえば「全共闘」運動があり三島事件があり、おびただしい事件があつた。しかしその渦中にいた私と現在の私とのあいだに確実な自己同一性を認めることはできない。あえて認めようとすればするほど、言葉は虚偽にまみれてしまう。<sup>2</sup>「現実」はある、が現実感がない。とすれば、むしろ「現実」の方が疑わしいのだというべきだろうか。

むしろ私はたんなる懷疑論を吐いているわけではない。たとえばピフテキというものは実在せず、ピフテキという觀念があるだけだといきつた、徹底した觀念論者バークレーですら、眼の前にあるピフテキに舌なめずりする生理を疑つたわけではない。バークレーにせよ、デカルトにせよ、彼らの懷疑は実際の日常において彼らがしたたかなりアリストであつたことと矛盾しないのである。終生「他我はいかに可能か」と問いつづけたフッサールにしても同様であつて、むしろ彼ら<sup>3</sup>の「方法的懷疑」は彼らの生活者としての確かさに支えられていたのであり、そこに青ざめたロマン派の風貌<sup>ふうぼう</sup>もしたりげな護教論者の姿勢も見出すことはできない。彼らはある意味では「現実」を、他者を見じんも疑わなかつたし、同時に彼らは主観性の霧のなかでそれらがどうして成立するかということに関しては、何の確かさも見出せなかつたのである。

ドストエフスキーを論じて、小林秀雄は、近代の間は「如何<sup>いか</sup>に生くべきか」という問いを自意識の上に求めるほかないのだ、といっている。自意識の上に求めるかぎり、絶対的な解決はありようがない。同じいいかたをすれば、近代哲学者らはい

かに認識するののかという問いを主観性の上に求めるほかなかった、といつてもよい。主観性という基軸をはなれて、生くべき規範も認識すべき対象もないということが、近代哲学につきまといつて最大のアポリアである。つまり、すべてを主観性（自意識）の上に基礎づけねばならないが、だとすれば外界あるいは他我というものはついに見出すことができない、というアポリアである。メルロー・ポンティにいたるまでの近代哲学の歩みは、おそろくただ一つの問いをめぐつてきたように思われる。それはたんなる抽象的思弁の連鎖ではなく、それぞれが現実との、他者との生ける関係をとりもどそうとする「方法的懷疑」の持続にほかならなかった。

最近私は、小林秀雄以来の日本の批評家はおしなべてコギト主義的迷蒙に閉ざされており、いまや反コギト的に逆転しなければならぬと唱える新批評家があらわれて、その無邪気さに呆然としたことがある。フランスの最新理論に通暁しているらしいこの批評家は、たぶんデカルトを自身で読みこんだこともないにちがいない。読もうとすれば、そこに私たちが迫られているものと基本的に変わらぬ知的格闘の息づかいを感じられるはずだからだ。近代的個人主義一般とデカルトの「方法的懷疑」の区別もつかないような者にとつて、思想史はおよそ誤謬の歴史にすぎまい。思想史のおおざっぱな流れに眼をやるだけなら、そこに幾人か他にかながたい個人的思索者がいたことは見うしなわれざるをえないのだ。が、彼らは彼ら自身の思考の徹底性によつて、今もこう語りかけているのである。「現実」はある、が、現実感がないというような状態において、それを解決する道はただ「非現実感」を方法的に問いつめることであり、それ以外に真の意味での現実回復はありはしないのだ、と。

昨年の暮れ、川村二郎が、最近の小説家は総じて「内面への道」を歩んでいると書いて以来、幾つかの反論があらわれているが、それらに共通するのは「内面への道」が「現実」に対するアンガージュマンを放棄しているという、ありふれた非難である。しかし川村氏の真意はともかく、私の考えでは「内面への道」とはいわば「外界への道」にほかならないのである。こういつてよければ、デカルト以来の「方法的懷疑」は「内面への道」であり、したがつて同時に「外界への道」でもあったのだ。素朴な唯物論（＝観念論）のあずかり知らぬ知的厳密性によつて、彼らは「外界への道」を模索してきたのである。くりかえすまでもなく、彼らが実生活においてきわめてリアリティックだったことは当然であり、彼らの「内向性」はけつして「自閉性」を意味しはしな

いのである。

小田切秀雄は、「自我と個人的な状況のなかにだけ自己の作品の真実の手ごたえを求めようとしており、脱イデオロギーの内向的な文学世代として一つの現代的な時流を形成している」作家たちを批判しているが、そのなかには当然古井由吉や後藤明生がふくまれるであろう。しかし小田切氏は彼らがきわめて意識的な「方法的」作家であることを見ようとしていない。

7 古井氏の「査子」を例にとれば、ここには離人症とみなしていい女が描かれている。離人症の病者とは、いわば「他我はいかに可能か」という現象学的懷疑を方法的ではなく彼ら自身が生きてしまった人間の謂である。自閉症者とは逆に、彼らは他者と交わるけれども、ただ他者が感じられないのである。しかし離人症の病者とわれわれに違いがあるとすれば、われわれにはたとえ現実感が稀薄であっても、なお「現実」を信じてことができ支障なく暮らしようということだけだ。しかも、実際には古井氏は離人症でも、神経症的な文学青年でもなく、意外なほどリアリスティックな作家である。それは「不眠の祭り」などにおける、鋭い「政治」的洞察によっても明らかであろう。

「査子」において古井氏が書いたのは、充実した現実感をはげしく渴望しながら、しかし、贗物の「現実」に自足することをあくまで拒むということだった。これは甚だ明晰な意志であり、また自閉的（内向的）傾向とは正反対といわねばならない。氏が求めているのは、まさに生ける他者であり外界なのだから。

小田切氏らは、彼らの「方法的懷疑」をたんなる「脱イデオロギー」「脱政治」と解してはばかるところがない。それはむしろ羨望すべきオプティミズムといわねばならない。外界が確実にみえていることを疑ったことすらないことを、それは示しているからだ。たとえば、氏は現在が「昭和十年代」の様相に似てきたことを危惧をもって語っている。しかしこういう類推ほどあやふやなものはない。似ているといえは、日本の近代はどこを截断しても相似形をしているはずだからだ。また類推に関していえば、ほんの二、三年前急進的學生運動が燃えさかっていたころ、そこに「ルッターの宗教改革に比すべき文明史的意義」を発見したりする類の論者が続出したが、早くも今や、「昭和十年代」というわけである。この種のアナロジーにはおよそ怠惰な知性の働かしかない。彼らの洞察力の浅薄さは、社会現象の根底にある精神的状況をみることなく、ただその表層のみを次次と

類推的解釈によって埋めてきたというところにある。それは知的頹廢たいはいでしかないのだが、頹廢を自覚しないのはいつも「現実」に密着したつもりになっているためである。

(柄谷行人「内面への道と外界への道」)

〔注〕森有正：フランス文学者・評論家。

「全共闘」運動：全学共闘会議が牽引けんいんした、昭和四十三～四十四年の大学紛争。

三島事件：昭和四十五年に作家三島由紀夫が自衛隊市ヶ谷駐屯地ちやうとんに侵入し、演説をした後割腹自殺した事件。

他我：「自我」に対する「他者の我」、他者の意識。

方法的懷疑：確実なるものに到達するために手段として用いられる懷疑。

小林秀雄：評論家。

アポリア：解決困難な問題。

メルロー＝ポンティ：フランスの哲学者。

コギト主義：「私は思考する」ということを中核に据えた考え方。

川村二郎：ドイツ文学者・評論家。

アンガージュマン：サルトルの概念で、態度を明確にして政治や社会に参加すること。

小田切秀雄：文芸評論家。

古井由吉：小説家。

後藤明生：小説家。

「查子」：昭和四十五年に発表された小説。芥川賞を受賞した。

オプティミズム：楽観主義。

アナロジー：類推。

問一 傍線部1「深い霧のなかに沈みこんでいる」とは、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものをつ選べ。

- a 現実の体験を再現できなくなること。
- b 現実の体験が自分から離れてゆくこと。
- c 現実の体験を幻想的なものにする。
- d 現実の体験が徐々に重みを増してゆくこと。

問二 傍線部2「現実」はある、が現実感がない」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものをつ選べ。

- a 過去の体験が、現在の私の現在への関心を稀薄にしていること。
- b 過去の体験が、現在の私の経験知を形成していること。
- c 過去の体験が、現在の私の感受性を歪<sub>ゆが</sub>めていること。
- d 過去の体験が、現在の私のなかに何の痕跡も残していないこと。

問三 傍線部3「彼らの「方法的懷疑」は彼らの生活者としての確かさに支えられていた」とはどういうことか。次の中からも適切なものを一つ選べ。

- a 彼らの「方法的懷疑」は、現実や他者をありのまま認めることの上に成立していたということ。
- b 彼らの「方法的懷疑」は、日常生活者として現実や他者と誠実に向き合うことから生まれたということ。
- c 彼らの「方法的懷疑」は、現実や他者を主観性にまどわされないで受けとめることを経て育まれたということ。
- d 彼らの「方法的懷疑」は、日常生活者としてロマンチズムに陥らないようにする努力によって維持されていたということ。

問四 傍線部4のように筆者が考えるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a いかによくべきかという問いを自意識の上に求めることは、外界や他我と対立してしまうから。
- b いかによくべきかという問いを主観性の上に求めると、抽象的思弁の連鎖に陥るから。
- c いかによくべきかという問いを自意識の上に求めること自体が、不毛であるから。
- d いかによくべきかという問いを主観性の上に求めるかぎり、絶対的な解決はないから。

問五 傍線部5「ただ一つの問い」とはどのようなことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 主観性に基づいて、現実や他者を抽象的思弁の連鎖のなかで認識すること。
- b 主観性に基づいて、外界や他我を受け入れて連帯を深めること。
- c 主観性に基づいて、現実や他者との生き生きとした関係を回復すること。
- d 主観性に基づいて、外界や他我と折り合うことのできる規範をつくること。

問六 傍線部6のように筆者が言う根拠は何か。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

- a 川村二郎の言う「内面への道」は、「現実」と対抗する点において「外界への道」の面をも持っていること。
- b デカルト以来の「方法的懐疑」は、外界や他我をどう認識するかという「外界への道」を模索していたということ。
- c 川村二郎の言う「内面への道」に対する反論は、表層的理解に基づく非難であること。
- d デカルト以来の「方法的懐疑」には、生活者としての現実に対する知恵が反映されていること。

問七 傍線部7について、「古井氏」が「杳子」において「離人症とみなしていい女」を描いたことを、筆者はどう評価しているのか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

- a 現実感を求めつつもにせものの「現実」には満足しない女を描くことで、生きている他者を表現しようとした。
- b 他者と交わるが他者を「現実」として感じるができない女を描くことで、離人症そのものが提示された。
- c 他者と距離をとり「現実」としての生活に支障をきたす女を描くことで、個人に対する外界の抑圧が提示された。
- d 現実感が稀薄でかつ「現実」を信じられない女を描くことで、自我に執着する内向的な文学の世代の作品が成立した。

問八 傍線部8はどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

- a 離人症の病者は、他人の我をどのように共有できるかという問題に、実践を通して取り組んだ人であるということ。
- b 離人症の病者は、他人の我をどのように制御できるかという問題に、心血を注いだ人であるということ。
- c 離人症の病者は、他人の我をどうしたら認識できるかという問題を、身をもって体験した人であるということ。
- d 離人症の病者は、他人の我をどうしたら克服できるかという問題と、果敢に戦った人であるということ。



問九 傍線部9について、「むしろ羨望すべきオプティミズムといわねばならない」には、筆者のどのような気持が表われているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 「方法的懷疑」を「脱イデオロギー」と見なすことは誤っており、不快を感じている。
- b 「方法的懷疑」を「脱イデオロギー」と理解することは短絡であり、呑気だのんきと思っている。
- c 外界を疑ったことがないということは理想的なことであり、自分もそうありたいと願っている。
- d 外界を疑うことに付随する苦悩を持たないという点において幸せだ、と揶揄やゆしている。

問十 傍線部10について、「氏」がこのように「語」る原因を、筆者はどう考えているのか。次の中から適切でないものを一つ選べ。

- a 氏が、学生運動を宗教改革に見立てるような論者の影響を受けている。
- b 氏が、日本の近代がどこを切っても相似形を呈していることに気づいていない。
- c 氏の思考が、社会現象の根底に存在する精神的状況を見ていない。
- d 氏が、「現実」に自身が即応しているつもりになっている。

二

次の文章は『蜻蛉日記』の一節である。病氣になり自宅で療養している夫、兼家のもとに、作者は夜、ひそかに見舞いにいく。これを読んで、後の問に答えよ。

火ともしたる、かい消たせて降りたれば、いと暗うて、入らむかたも知らねば、「あやし、ここにぞある」とて、手を取りて導く。「など、かう久しうはありつる」とて、日ごろありつるやう、くづし語らひて、とばかりあるに、「火ともしつけよ。いと暗し。さらにうしろめたなくはな思しそ」とて、屏風のうしろに、ほのかにともしたり。「まだ魚なども食はず、今宵なむおはせばもろともにとである。いづら」など言ひて、ものまゐらせたり。すこし食ひなどして、禪師たちありければ、夜うち更けて、護身にとてもものしたれば、「いまはうち休みたまへ。日ごろよりは少し休まりたり」と言へば、大徳、「しかおはしますなり」とて、立ちぬ。

さて、夜は明けぬるを、「人など召せ」と言へば、「何か。まだいと暗からむ。しばし」とてあるほどに、明うなれば、をのこども呼びて、葷上げさせて見つ。「見たまへ、草どもはいかが植ゑたる」とて、見出だしたるに、「いとかたはなるほどになりぬ」など急げば、「なにか。いまは粥などまゐりて」とあるほどに、昼になりぬ。さて、「いざ、もろともに帰りなむ。または、ものしかるべし」などあれば、「かくまゐり来たるをだに、人いかにと思ふに、御迎へなりけりと見ば、いとうたてものしからむ」と言へば、「さらば。をのこども、車寄せよ」とて、寄せたれば、乗るところにもかつがつと歩み出でたれば、いとあはれと見る見る、「いつか、御ありきは」など言ふほどに、涙うきにけり。「いと心もとなければ、明日明後日のほどばかりにはまゐりなむ」とて、いとさうさうしげなる気色なり。すこし引き出でて、牛かくるほどに見通せば、ありつるところに帰りて、見おこせて、つくづくとあるを見つつ引き出づれば、心にもあらで、かへりみのみぞせらるるかし。

〔蜻蛉日記〕

〈注〉○護身…護身法のこと。密教において心身を守るために行う法。

問一 傍線部1「いと暗うて」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 作者の来訪を家の他の者に悟られないようにするため、迎えに出た兼家が火を従者に消させたから。
- b 車から降りるとき人目につかないように、兼家が待ち受けて灯しておいた火を従者は従者に消させたから。
- c 車から降りる時自分の姿が露わにならないように、従者に持たせた手燭てしよくを作者自ら吹き消したから。
- d ひそかな訪問のため、兼家の家に灯されていた灯火が風が吹いて消された時を見計らって、車から降りたから。

問二 二重傍線部K、Nの接続助詞「ば」のうち、上に接続する語の活用形が他の三つと異なるものを一つ選べ。

- a K
- b L
- c M
- d N

問三 傍線部2「など、かう久しうはありつる」と言った時の兼家の心情としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a なぜすぐに灯火をつけないのかという気持ち。
- b なぜ早く部屋の中へ入って来ないのかという気持ち。
- c 作者とこんなすぐ逢えるとは思わなかったという気持ち。
- d 作者と逢うのが待ち遠しかったという気持ち。

問四 傍線部3「さらにうしろめたなくはな思しそ」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 少しも心配なさることはない。
- b これ以上心配なさってはいけない。
- c 決して引け目をお感じになつてはいけない。
- d これ以上引け目をお感じになる必要はない。

問五 二重波線部 P ～ S のうち、品詞が他の三つと異なるものを一つ選べ。

a P    b Q    c R    d S

問六 波線ア～エは、誰の言葉か。その組み合わせとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a ア…兼家    イ…作者    ウ…兼家    エ…作者  
b ア…兼家    イ…作者    ウ…作者    エ…兼家  
c ア…作者    イ…兼家    ウ…作者    エ…兼家  
d ア…作者    イ…兼家    ウ…兼家    エ…作者

問七 傍線部 4、5 の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 兼家が作者に、一緒に作者の家に行こうと戯れたのに対し、作者は、療養中の兼家を迎えに来たのだと人に思われたら嫌だと返している。

b 作者が兼家に、一緒に作者の家に帰ろうと頼んだのに対し、兼家は、女性である作者の方から夫を迎えに来たと知れたら大変だと断っている。

c 兼家が作者に、人に知られないうちに従者とともに帰ってほしいと言ったのに対し、作者は、自宅から迎えが来なければ帰ることはできないと返している。

d 作者が兼家に、従者とともに帰るとお別れの言葉を述べたのに対し、兼家は、今回の逢瀬では物足りないので帰ったら迎えを寄こしてほしいと頼んでいる。

問八 傍線部6「かつがつと歩み出でたれば」とは兼家のどのような様子を表しているか。次の中からもっとも適切なものをつ選べ。

- a 病気を感じさせないしつかりした足取りで出てきた様子。
- b 大慌てで、ドタバタと出てきた様子。
- c やつとといった具合で危ない足取りで出てきた様子。
- d ドンドンと足音を立てて不満そうに出てきた様子。

問九 傍線部7「かへりみのみぞせらるるかし」から分かる作者の心情はどのようなものか。次の中からもっとも適切なものをつ選べ。

- a 兼家が次にいつ自分のもとを訪れてくれるのか気がかりである。
- b 病気が快癒しない兼家のことが心配でたまらない。
- c 兼家の病状が着実に良くなっているのを安心してている。
- d 兼家を残して一人で帰ってきたのを後悔している。

問十 次のA～Eの作品を成立年代の古い順に並べたものとして正しいものを次の中から一つ選べ。

- A 『土佐日記』    B 『山家集』    C 『古今和歌集』    D 『更級日記』    E 『蜻蛉日記』
- a A↓C↓E↓B↓D    b E↓A↓D↓B↓C
- c B↓E↓D↓A↓C    d C↓A↓E↓D↓B
- e C↓D↓A↓B↓E    f A↓D↓C↓E↓B

三

次の文章を読んで、後の間に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

所好軒者、袁子蔵書処也。袁子之好衆矣、而胡以書名蓋与群

好敵而書勝也。其勝群好奈何。曰、「袁子好味、好色、好葺屋、好

游、好<sup>レ</sup>友、好<sup>二</sup>花竹泉石<sup>一</sup>、好<sup>二</sup>珪璋彝尊<sup>一</sup>、名人字画、又好書。書之好、

無以異于群好也<sup>2</sup>。而又何以書独名。曰、「色宜<sup>二</sup>少年<sup>一</sup>、食宜<sup>レ</sup>饑、友

宜<sup>二</sup>同志<sup>一</sup>、游宜<sup>二</sup>晴明<sup>一</sup>、宮室花石古玩宜<sup>二</sup>初購<sup>一</sup>、過是欲少味矣<sup>3</sup>。

書之為<sup>レ</sup>物、少壯、老病、饑寒、風雨、無<sup>レ</sup>勿<sup>レ</sup>宜也。而其事又無<sup>レ</sup>尽<sup>4</sup>。

故勝也。雖然、謝衆好而暱焉、此如下<sup>レ</sup>辞<sup>二</sup>狎友<sup>一</sup>而就<sup>中</sup>嚴師上也。好之偽者

也。畢衆好而從焉、如賓客散而故人尚存也。好之独者也。昔曾皙

嗜<sup>二</sup>羊棗<sup>一</sup>、非<sup>レ</sup>不嗜<sup>二</sup>膾炙<sup>一</sup>也。然謂之嗜膾炙、曾皙所不受也。何也。衆

人所<sup>ナレバ</sup>同<sup>ジクスル</sup>也。余之他好衆同、而好書從<sup>ハ</sup>獨<sup>ニ</sup>、則以<sup>チ</sup>所<sup>ヲ</sup>好<sup>ム</sup>歸<sup>スル</sup>書也、固<sup>7</sup>宜<sup>ナルカナト</sup>。

(袁枚「所好軒記」)

〔注〕○袁子—筆者・袁枚。 ○葺屋—かやぶきの屋根。

○珪璋彝尊—古代、祭祀に用いられた玉の飾りや器物。

○暱—慣れ親しむ。

○狎友—気のおけない友人。

○曾皙—孔子の弟子。

○羊棗—なつめ。 ○膾炙—なますとあぶり肉。誰もが好きなごちそう。

問一 傍線部「与群好敵而書勝也」の書き下し文としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 群好の書に敵せんよりは勝れるなり。
- b 群好に敵を与ふるは書の勝れるなり。
- c 群好と敵して書勝れるなり。
- d 群好の与めに敵すれども書勝れるなり。

問二 傍線部2「無以異于群好也」はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 書物を好むことが他の物を好むことより奇妙だとは言えない。
- b 書物を好むことと他の物を好むことは、大して違わない。
- c 書物を好む度合いが他の愛好家たちより飛び抜けているということはない。
- d 書物を好む度合いが他の愛好家たちからは常軌を逸して見えるのではないか。

問三 傍線部3「過是欲少味矣」はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a かつて愛好していた物に対しては、愛着が薄くなりつつある。
- b 欲求を小さく抑えようとするところそが大きな誤りである。
- c のめりこみすぎた時は、楽しむ機会を減らそうとする。
- d あるタイミングを逃してしまつと味わいが薄くなつてしまふ。

問四 傍線部4「焉」と同じ用法のものはどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 修其行、正其業、而天下順焉。
- b 過而能改、善莫大焉。
- c 天下之父帰之、其子焉往。
- d 十室之邑、必有忠信如丘者焉。



問五 傍線部5「如賓客散而故人尚存也」はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a どんなに趣味の範囲が広がっても、蔵書の楽しみは常に変わらない。
- b 年齢とともに趣味の数が減り、今では旧友との語らだけが楽しみだ。
- c 様々な趣味をやり尽くして、最後に残ったのが書物を集めることだった。
- d 趣味を同じくする友人達は次々と去り、自分だけが残されてしまった。

問六 傍線部6「謂之嗜膾炙、曾皙所不受也」はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 曾皙はなますやあぶり肉は大嫌いで、昔からなつめが好物だ。
- b 曾皙はなますやあぶり肉も食べるよう言い聞かされても、承知しないだろう。
- c 曾皙はなますやあぶり肉が嫌いなふりをしていただけで、本当は大の好物だ。
- d 曾皙はなますやあぶり肉が嫌いではないのだが、好きだとは決して言わないだろう。

問七 傍線部7「固宜」とする理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 蔵書の趣味だけは、他人の嗜好しやうに流されず、自分の心からの楽しみであるから。
- b 蔵書の趣味は年齢や状況とは無関係に、常に変わらず楽しめるから。
- c 蔵書の趣味は、厳格な教育を受けるのと同様な精神的成長をもたらすから。
- d 蔵書の趣味によって、隠遁生活の孤独を慰めることができるから。

問八 曾皙は孔子の弟子の一人である。次のうち、孔子の弟子ではない人物は誰か、一つ選べ。

a 子路

b 周公旦

c 顔淵

d 閔子騫



